

「帳合之法」の出版と福澤諭吉

【はじめに】

「帳合之法」は、福澤諭吉（以下、「福澤先生」）が米国の初級学校用簿記教科書である「Book-keeping」という書物を翻訳し、我が国に初めて西洋簿記学を紹介したもので、1873＝明治6年6月に「初編」二冊、翌年6月に「二編」二冊が刊行されました。我が国独自の会計や帳簿組織は伝統的に引き継がれてきていましたが、西洋簿記学に関する文献は、この頃になって初めて出版されるようになり、帳合之法が最初に刊行され、それに続き、明治6年10月及び10年4月に加藤斌（あきら又は、なかば）の「商家必用」が翻訳出版され（イギリス簿記書の翻訳版）、3番目にアラン・シャンドの「銀行簿記精法」が出版され、当時の銀行実務の基本になりました。

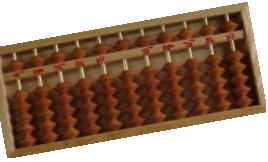
なお、帳合之法の刊行については、「三田評論」2006年4月号（No. 1089）の西川俊作氏の『「帳合之法」と簿記の日』で紹介されています。「簿記の日」は二月十日ですが、福澤先生が、帳合之法初編「凡例」（序文）に記した、「明治六年二月十日譯記」という日付に因んで、「全国経理教育協会」が定めたものです。

★参考文献：下記本文中に記載した文献の他、帳合之法及び帳合学に関する片岡泰彦氏の「福澤諭吉『帳合之法』に関する一考察」を参考にさせていただきました。有難うございました（インターネット検索可）。

【帳合之法の翻訳・出版について】

「帳合之法」は、慶應義塾出版局から出版されました。読みは「チョウアイノハウ」です。当時、Book-keepingの訳語は、日本にはなく、先生は、世間で使われていた「帳合わせ」から「帳合」という言葉を思いついたようですが、のちに「簿記の字をもちいざりしは、余り俗に過ぎたようで一般化しなかつた」と反省されています。帳合之法初編の表紙（添付資料1参照）には、「大帳」、「金銀出入帳」、「仕入帳」、「日記帳」、「手形帳」、「売帳」の帳簿と、ページの下には算盤（双露盤）のイラストも描かれています。表紙をめくると、「凡例」（序文）が出てきます。凡例では、最初に、「此帳合法ノ原書ハ 千八百七十一年アメリカ商賣学校ノ先生「ブライヤント」 並ニ 「スタラットン」ノ両人が著述セシ学校用「ブックキイピング」と云フ書ナリ 「ブックキイピング」トハ帳合ノ事ナリ」、これに続いて、「此帳合ニ 略式ト本式ト 二様アリ 初編二冊ニハ先ヅ略式ノミヲ譯シ 本式モ其譯 半成リタレバ 近日コレヲ第二編トシテ出版ス可シ」と書かれています。

先生は、原典の著者として、「ブライヤント Bryant」と「スタラットン Stratton」の二人の名前を挙げていますが、「パッカード Packard」も加わり、3人の共著によるものです。原著は、Common School 版の Bookkeeping ; embracing Single and Double Entry, New York, 1871年ですが、彼らは、High School 版、Counting House 版も刊行しています。先生は、Common School 版以外の翻訳は、後進に委ねました。また、「略式・本式」は福澤先生の訳で、略式は single entry（単式）、本式は double entry（複式）です。



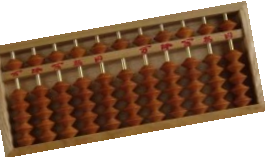
凡例では、続いて、この書の翻訳の趣意について触れています（以下、可能な範囲で、現代的表記に改めました）。

第一点は「実学尊重」です。「第一、古来日本国中に於いて学者は必ず貧乏なり。金持は必ず無学なり。故に学者の議論は高くして口にはよく天下をも治ると云えども、一身の借金をば払う事を知らず。金持の金は沢山にして或はこれを瓶に納（め）て地に埋（め）る事あれも、天下の経済を学びて商売の法を遠大にする事を知らず。蓋し其由縁を尋るに学者は自から高ぶりて、商売は士君子の業に非らずと考へ、金持は自から賤しめて、商売に学問は不用なりと思つている。知る可きを知らず学ぶ可きを学ばずして、ついに此弊に陥りたるなり。何れも皆商売を軽蔑、これを学問と思はざりし罪と云う可し。今此学者と此金持とをして此帳合の法を学ばしめなば、始めて西洋実学の実たる所以を知り、学者も自から自身の愚なるに驚き、金持も自ら自身の賤しからざるを悟り、相共に実学を勉強して、学者も金持となり、金持も学者となりて、天下の経済史に一面目を改め全国の力を増すに至らんこととならう。訳者の深く願う所である」。

第二、第三点は、「会計を便利なものにする」と「学問と家業（農工商）とを連結すること」ですが、特に第三点では、「古来日本にて学問と家業とは互いに縁なく、学者は字を知るほど、益々高くして天にも登らんとし、無学の百姓、町人は益々軽蔑せられて地に入らんとするの勢いにて互いに近づくことなし」と我が国の実態を観察し、学問と家業・商売を連結することを提案しています。次に第四点、「商売を貴き学問と思わぬ心得違いを改めること」に進みます。「第四、帳合も一種の学問たるは此訳書を見て既に明白なり。されば商売も学問なり。工業も学問なり。又一方より論ずれば天の定則に従い心身を勞して其の報（報酬）をえるものは、商売なる故、役人の政（まつりごと）をして月給を得るのも商売である。古（昔）の武士が軍役を勤めて禄を得るも又商売なり。然るに世の人皆、武士役人の商売を貴く思い、物を売買し、物を製作する商売を賤しく思うは何故ぞ。結局、商売を貴き学問と思わない心得違いなり。其の心得違いの甚しきに至っては一身の利害をも忘るゝ者多し。試しに一例を挙げてこれを説明する（数字を掲げて丁寧の説明が書かれています）。・・・基本的には今までの学問は数千百年先の収入を考えるばかりで、利害得失を顧みず、みだりに商売、工業を軽蔑してこれを学問と思はざるの罪なり。今この「帳合之法」を翻訳・出版したのは、人をして学問の道より進み、商売工業の門に入り、独立の大志を起こさしめんとすることが趣意なり」と結んでいます。

【翻訳時の苦勞】——日本初の簿記用語の翻訳の苦勞・工夫——

「福澤全集緒言」には、「余が著訳書中、最も面倒にして最も筆を勞したるものは帳合之法なり。旧幕府時代に一寸その原書を見たることあれども余り心に留めず、書中の二、三枚を読て何か是れは金銭の請取書を認むる方式にてもあるかと思ひしのみにてそのまゝに捨置きしが、明治維新後に至りて横浜の一友人が新舶来の原書を携え来り、本書はブック・キーピングとて金銭の受授取引、会計の法を記したるものにして、商家の必用欠くべからざるものなりと云う。依て之を手に取り尚お二、三日留め置きて熟覽すれば、如何にも商売用の書にしてその帳面の仕組甚だ密なるが如し。余が生来の境遇、日本流の大福帳（当時の我が



国商売の代表的な帳簿) さえ一見したることはなけれども、今この原書を翻訳すれば大福帳の法に優ること万々なりと深く自ら信じ、直ちに翻訳に着手して、その原文を読むは左まで困難ならざれども、之を訳して商人の実用に供せんとするには、先ず日本商家の実際に取り引する模様を知り、商家通用の言葉を知ること肝要なり。・・・次に大困難は金高を記すに何百何十何円何十何銭(帳合之法原文では、漢数字もすべて「縦書き」と日本流に書けば文字長く随て帳面も多くなりて逆も実用に適せず。然らば三二五、七八と記して三百二十五円七十八銭と読ませんかと思えども、古来絶えて例なきことなれば逆も通用六(むず)かしからん、夫れよりも西洋の数字は僅に九字なれば之を日本人に覚えさせることとして、豎(たて)の訳書に数字ばかりを横にして西洋の原字を用いん、斯くすれば1何万何千何百何十の順序は左より右へ計えて日本の双露盤の桁と恰も同様なるゆえ人の呑込みは易からん、左りとて日本人に新に九字の西洋文字に用いしむるは中々の困難なり、如何して善からんと思案に悩み、幾回か系(罫)紙の版を彫刻してその体裁を試みたれども、何分にも自から釈然として安んずるを得ず、一進一退、不決断の折柄、先年、余が米国在留中特に懇意にしたるチャー[ル]ス・ウールコット・ブルックスと云う商人が、維新後日本大使の為め種々周旋したるその由縁を以て我国に渡来し、府下木挽町の精養軒に止宿したることあり。依て余はこの人を尋問して話の序に右数字の翻訳法を相談せしに、ブルックスも色々考えたりしが、如何にしても新に西洋の数字を用うるは穩かならず、仮令い古来の例なきにもせよ日本の数字を用うるに若かずとの説にて、乃(すなわ)ちその説に従い思い切て日本字を豎に書き、百二十三円四十五銭を、一二三、四五と記するが如き体裁に決定したり。今日となりて見れば簿記学の翻訳も多く、・・・その初めに於ては之を訳すること最も易からず。・・・本(もと)を尋ねれば当時偶然渡来したる米国人ブルックス氏の賜なりと知るべし」と、翻訳にあたっての苦労話と工夫が書かれていました。

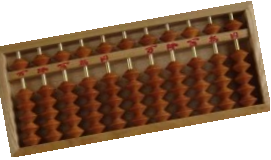
《福澤先生による「数字の表記法の発明(零の導入による日本数字の十進法表記の採用)と、縦書きの導入」》(数字は原本では縦書き)

(例) 十二万三千四百五十円 → 一二三、四五〇、〇〇〇
千二百三十四円五十銭 → 一、二三四、五〇〇

【西洋流記帳法に基づく帳簿見本について】

帳合之法では、西洋流簿記の帳簿記録に基づく、記載例(見本)が掲載されています。日記帳(day book)、大帳(元帳)(ledger)、現金出納帳(cash book)、資産負債表(statement)等のうちから二、三記載例を掲げておきます(添付資料2参照)。これを見ると、日本の帳簿がそのまま掲載されているように思う方もいるかも知れませんが、これらはすべて原著Book-Keepingからの翻訳です。先生が、人名勘定(取引先名称)、品名勘定(商品名)、取引単位等を、日本人の耳に慣れず、混乱が生ずることがないように、日本名に置き換えています(例:Roberts,Rhodesは甲州屋に、Lauren Y.Thomasは相模屋に、Rio Coffeeは上茶喜撰に、Best Black Teaは最高の紅茶になど。該当例の表示が不十分で、申し訳ありません)。また数字の表記も、先ほど述べた通りの方式で書かれています。

私の力量もあり、ここでは、和式帳簿、米国式帳簿、英国式帳簿等の違い等については解



説できずに申し訳ありません。添付資料は、米国式帳簿を縦書きに翻訳したものです。

【結びに代えて】

先生は、後に出版された「民間経済録」出版時の回想録を見ると（「福澤全集緒言」参照）、
「明治6年の頃、帳合之法を発行して、書物は売れたれども、忝この帳合法を商家の実に用いて店の帳面を改革したる者は甚だ少し。聊（いささ）か落胆せざるを得ず。その実用に適せざるは尚お忍ぶべしとするも、偶ま当時新進の商人又は会社などにて西洋風を気取り、万般の施設を新奇にして、帳簿は無論彼国の流儀に限るなどゝて新法を採用したる者の中には、商運非にして往々失敗したる連中も少なからず。その原因は必ずしも帳合法の罪に非ざるべけれども、著者の身に於ては蔭ながら赤面せざるを得ず。依て窃かに按ずるに、商工社会の人がその営業を西洋風にせんとすれば、先ず西洋の経済主義を知ること肝要なり、その根本大体の主義を知らずして単に帳簿の風を改革するが如き、事の順序に非ず、左れば今日、西洋経済の大概を広く民間の子弟に教えてその成長を待つこそ無難の策にして、帳合法も始めて実際の用を為すべしと思ひ、恰も学校読本の体裁に綴りたるものは民間経済録なり」と記されています。帳合之法出版後の少々の落胆と、揺ぎ無い強い信念とが窺われますが、「この書も時の需要に適したることゝ見え発売頗る盛なりしが、爰に序ながら記すべき事こそあれ。明治十四、五年の頃なり。政府が教育に儒教主義（儒教を教育の中心に据える教育方針）とて不思議なることを唱え出し、文部省にては学校読本の検定と称して世上一般の著訳書等を集め、省の役人が集会してその書の可否を議定し、又は時候後れの老儒者を呼び集めて読本の編纂を囑託するなど、恰も文明世界に古流回復の狂言を演ずるその最中に、福澤の著訳書は学校の読本として有害無益なりと認められ、唯の一部も検定に及第せざりしこそ可笑しけれ」と、当時の率直な印象も付け加えられています。「一身独立して一国独立す」、一身を独立させるためには学問（実学）が不可欠であるという強い信念に基づき書かれたもので、「学問のすゝめ」と同じ精神であり、古い学問観では学問でないかのごとく見られてきた「帳合」なるものを新しい学問の一つとして説くために書いたのがこの書であり、正に「すゝめ」の続編です（すゝめの翌年刊行）。

司馬遼太郎が「アメリカ素描」という書物の中で、福澤諭吉の「帳合之法」に触れていますが、「その本の凡例のなかの福沢の文章がおもしろい。西洋では“商売”というものが学問化されているというのである」、「古来日本国中に於て、学者は必ず貧乏なり、金持は必ず無学なり。故に学者の議論は高くして、口にはよく天下を治ると云へども、一身の借金をば払ふことを知らず。・・・」日本で、ビジネスをカタカナで表記した最初の人、福澤諭吉だったとも紹介しています（商売＝ビジネス＝business）。

（石川 武）



タイトル	帳合之法. 初編. 一
別タイトル	Bookkeeping
著者	福澤, 諭吉 (Translator)
出版地	東京
出版者	慶應義塾出版局
出版年	1873 (明治6)
識別番号	福澤関係文書(マイクロフィルム版)分類: F7 A19-01 請求記号: 福 19-1 著作

【解説】

日本に於ける西洋簿記学の最初の文献である。アメリカで連鎖組織の商業学校六十校ほどを経営していたブライヤントおよびストラットン共著の学校用簿記教科書(Bryant and Stratton, Common School, Book-keeping) を翻訳したもので、まだ「簿記」という訳語がなく、わが国の商店などに用いられる「帳合」の語を以てこれに当てた。そのほか単式を「略式」、複式を「本式」とするなど、初めて訳語を案出するに苦心した。日本数字を縦に並べる表記法は、この書の翻訳に当って福沢の案出したもので、現在でも国家財政や会社の決算報告などにこの方式に拠っているものが見られる。

木版半紙判(二二・五×一五・二 cm)、初版二冊、二編二冊。表紙は黒白の縞模様「慶應義塾蔵版」の六字を散らし書きに陰刻し全面に銀粉を刷きつけた用紙を使い、左上に題箋が貼ってある。題箋には子持罫の中に「帳合之法 初編一(二)」と記してある。

見返しは上部に黒版と天秤の衡、下部に算盤、右側に帳簿三冊と毛筆、左側に帳簿三冊と天秤棒とを描き、これを上下左右の枠としたその中央に「福沢諭吉訳/ 帳合之法初編二冊/ 慶応義塾蔵版局」と記し、「慶応義塾出版局」の文字の下に「慶応義塾蔵版之印」が捺してある。上部の黒版には白字で「2533\1873 \ 明治六年六月」と記し、右側の帳簿には「大帳」「金銀出入帳」「仕入帳」、左側の帳簿には「日記帳」「手形帳」「売帳」とそれぞれ記され、右側の毛筆の軸には「筆端能ク一世ヲ経緯シ」、左側の天秤棒には「努力以テ天下ヲ富実ス」の文字が記されてある。

巻之一は凡例八丁、文末に「明治六年二月十日」の日附がある。本文五十九丁。巻之二は本文六十九丁である。二編の初版本は未見であるが、再版本によりて察するに、初編とほぼ同様の体裁と思われる。

明治九年に再版が出た。再版本の表紙は網目模様の地紋の濃藍色。題箋は大体初版本と同様であるが、書名の右肩に「福沢諭吉著」の小文字が加えてある。見返しは蔵版印が「福沢氏蔵版印」と改まっている外は、初版本と変りがない。巻之二の最後に左の奥附がある。

定価六拾五銭 明治九年二月二日 版權免許 東京第二大区九小区 三田二丁目拾三番地 福沢諭吉

なお、ウラ表紙の内側は、次の通り売捌人の連名が掲げてある。すなわち「売捌人」と横書きし、その下に「慶応義塾出版社/東京三田二丁目二番地/ 山中市兵衛/ 同芝三島町/丸家善七/同日本橋通三丁目川善兵衛/大阪北久宝寺町四丁目/大野木市兵衛/ 同心斎橋壱丁目/梅屋亀七/同備後町四丁目/武藤吉二郎/同谷町三丁目」

二編は、初版本を見ていないので、再版本によってその姿を記しておく。表紙は初編の再版本に同じで題箋も同様である。巻次は初編から追って「三、四」となっ

ている。見返しも初編とほぼ同じで、上部黒版の中の文字が「2534 \1874 \明治七年六月」と改まり、「福沢諭吉訳」の文字の下に「福沢氏蔵版印」が捺され、「慶応義塾出版局」の文字の下に「定価六拾五銭」の長方形朱印が捺してある。

巻之三は訳者附言二丁、本文第三丁から第四十八丁まで。巻之四は訳者附言一二丁、本文第一丁から第四十七丁まで。この一卷に限り帳簿様式を朱刷りとし、これに記入例を墨刷りと朱刷りととの二度刷りを用いてある。巻之四の巻末に「明治九年二月二日版權免許/東京第二大区九小区/ 三田式丁目拾参番地/ 福沢諭吉」と印刷してある。

以上の四冊を和紙木版刷りのまま合本して、西洋風の製本に仕立てたものがある。二五×一六・七 cm。ボール紙を芯にした厚表紙で、赤青黄の三色で細かなマーブル模様を染めた洋紙を貼り、背と上下の角を黒の皮装とし、背に「帳合之法」「福沢諭吉著」の金文字を打ち込み、書名の部分の皮を赤く染めてある。見返しは白の洋紙。和装本の見返しの図案を洋紙に印刷して扉とし、二編の初めにも同様の扉が挿入してある。蔵版印は初編二編とも扉に「慶応義塾蔵版之印」が押捺してある。初編巻之二の巻末は初版のままで、二編巻之四の巻末は再版に同じである。巻末頁の左下隅に「丸屋商社之印」と刻した矩形朱印が捺してある。

明治十一年に藤井清著「略式帳合法附録」という書が出た。「帳合之法」の和綴本と同大の木版和紙一冊本で、網目模様の地紋の青表紙である、見返しは黄色の和紙に「藤井清著/略式帳合法附録 全/ 明治十一年第十一月」と記し、下半部に「日記帳/大帳/ 金銭出納帳/ 手形帳/仕入帳/売帳/船積帳/雑費帳」と記してある。本文五十二丁。巻末に「明治十一年十月廿五日版權免許 定価貳拾五銭/著者兼出版人 山口県平民、藤井清 東京第二大区九小区三田四丁目廿六番地」と記し、ウラ表紙の内側に売捌人として慶応義塾出版社を筆頭に七名の書肆名が列記してある。

第一式 明治六年 七月一日 日記帳 東京三田 福澤屋諭吉		二丁 山城屋 上茶喜撰 拾介 同去器 七介 白砂糖 貳拾介 干葡萄 五箱五斗八 大和屋 二〇七文	二丁 河内屋 酢 七斗 上茶 三介 蜜柑 四箱 和泉屋 田一〇〇 塩漬豚肉 五拾介 塩麴 七箱 差引金 二
借	借	借	借
五	五二	七	七五

第一式 大帳		七月一日 品物 山城屋 五二〇	七月一日 干葡萄 七箱 大和屋 五
借	借	借	借
五	五	七	八
貸	貸	貸	貸
五	五	七	八

帳合之法 卷之三

譯者附言

福澤諭吉 譯

第二編ノ本式ニ至テハ諸帳面並ニ書付ノ數モ次第ニ増シ其名目ニ付テ混雜ヲ生ズ可ク或ハ横文ヲ讀ム人ハ原書ヲ見テ獨リ不審ヲ覺スルモアル可ケレバ此譯書中ニハ此原語ヲ斯ク譯セシトイフヲ知ラシメテ學者ノ便利ニ供ヘンガタメ其譯例ヲ示ス左ノ如シ

帳合
帳面
ブク
ブク
ブク

畧式	シンドル・エントリ	或ハ單記ト
本式	ドブル・エントリ	譯ハ二記ト
借	デビト	譯ハ借ト
貸	クレヂト	譯ハ貸ト
取列	トランス・アクティヴ	譯ハ取列ト
高賣	ビジネス	譯ハ高賣ト
勘定	エ・カサント	譯ハ勘定ト
差引又ハ抵ケ	サス・エ・カサント	譯ハ差引ト
元金	カピタル	譯ハ元金ト
利足	イン・タレント	譯ハ利足ト

元金
イン・タレント

日記帳

大帳

金銀出入帳

賣帳

清書帳

仕入帳

送狀

手形帳

手形

イン・タレント
デイブック
レヂヤル
ケシブック
セイユブック
ジユルナユ
イン・ウエントリ
イン・ボイス
ビルブック
ビル又ハ「ノ」ヲト

高賣品

平均又ハ殘金

平均改

元手又ハ手當

拂口又ハ引負

利益

損它

平等付合

平均表

為替又ハ兩替

メル・チャンガイズ
バランス
トライヤル・バランス
レソウルヌ
ライエビリチ
ダエン
ロス
エクスリブリム
バラシスシート
エキスタチンジ